新型コロナと私たち

子ども・学校・教育・社会

その4
追加分
（北海道・東京・京都他）

2020年6月12日

民主教育研究所

一斉休校 ―家庭との関係で考えた学校の役割

金馬国晴 （運営委委員　横浜国立大学）

学校の一斉休校は、社会問題が日常生活にいきなり切り込んできた一種の社会的事件と実感している。その影響の一つは、学校という場の役割を私たちに実感させた点にあろう。

朝から晩まで家で連日子どもと過ごす状況は、家族の結束を強めた面がある。私は全ての講義や会議と、夜や土日の出張もオンラインになったため、小３の長男と毎日毎日、朝昼晩の食事も風呂も遊びも３カ月間、明けても暮れても共にした。赤ちゃんから見ている親たちも、久しぶりに我が子と長時間向き合った期間であったろう。それはいい機会であったはずだが、ストレスを感じる人もいたという。虐待が増えたというが、人間関係の煮詰まりというか、甘えの出し合いというか、エネルギーや我がままのぶつけ合いがしばしば起こるからだろう。私も、子どもは親の言うことをきかぬ者とはわかっているし、自分もだだっ子だったというのに、託児所通いの２歳児も含めた我が子と毎日毎日一緒にいると、ギャーギャー騒いで止まらなくなったり、逆に何をしようと言ってもガンと動かなかったりで、感情的になって叱りつけてしまう瞬間もままあった。

では、家庭で我が子と共に過ごし続けることがストレスだ、という家庭にとって、学校に行かせる、行ってもらう、行ってくれる時間がある意味はなにか。そう考えさせられた。先生方は、親に代わって子どもとの生活を、寝る時間を除くなら実の親より多くの時間数を共にする。我が子一人と付きっ切りも大変というのに、何十人と継続的に向き合う先生の仕事を再認識するとともに、先生に一手に任せる近代社会が不思議にも見えてきた。公教育を私事の組織化と称した堀尾輝久理論が実感できてくるが、逆に教育を私事と自覚し、自分の子どもは自分で見尽くしたいとの親がいても、それは一つの選択肢という気もしてきた。

海外では、家族の宗教や考えなどを優先し、学校に通わせることなく勉強を教える親たちがいる。休校期間は、かなり多くの日本の保護者が「ホームスクーリング体験」をしたといえる。日本では、教育機会確保法(2016)で可能となったとはいえ普及していなかったところで、その擬似経験を突然に経験させられてしまったのがこの時期といえる。

こうして家庭学習ということで、危機感もかきたてられながら、通信教材やネット教材、問題集が普及していった。問題となってきたのは周知のように、全ての家庭が、パソコンを使う教材を駆使したり、他方で塾や習い事に入れたりが、できなかったり、そもそも関心なかったり、という格差問題である。教育産業が家庭に押し入ってきた、または逆に迎え入れられたといえよう。そこで、地方自治体は、宿題プリントの配付やそのネット配信、そして動画配信なども試みてきたわけだ。横浜市では、授業動画が地方局でも放映され続けた。

とはいえ、家庭は学校の知育を肩代わりする場ではない、との考えもある。それを思うと、我が子がドリルをのろのろやったりさぼったりするのを、厳しくとがめていいものか迷ったものだ。家庭がやる知育とは何だろうか。各家庭で違っていいはずだ。だがそれでは格差が出てしまう。よって学校から宿題を、休校期間の特別課題を出すことがいるが、では、どれほどの量がよいか。いろいろ思ったし、ネットなどで論争が起こり、必要な論争だ。

ただ、感染症予防の健康教育や、医療関係者の子への差別はいけないといった道徳性？の教育は、学校だけでなく家庭でもやるべきことではないか。格差は主に知育（知識、技能）について取り沙汰されるが、それ以上の生活の知恵などもまた、格差なく家庭と学校が連携して伝えるべきことだろう。態度、道徳性となると危険なところもでてくるが、むしろ学校の場で集団生活を共にして、子どもたちが自然と身につけられるよう、環境を整えることに学校の役割があろう。その“場”としての学校が重要と実感されてきた日々でもあった。

民研評議員会　地域交流資料　北海道①

北海道の現状

評議員　櫻井　幹二（北海道高校教職員センター付属教育研究所・相談所）

2月末に道独自の緊急事態宣言が出されて以来、学校の休校は約3か月に及びました。6月1日から学校は再開されましたが、この間当研究所・相談所も閉所状態が続き、現場の状況が全くつかめない状況でした。

今回の報告をするにあたり、再開後を含めた「現状と課題」という1点で、電話やメールで情報を収集した結果を報告します。

高校

札幌市内複数校（大規模普通高）に電話取材しました。いずれも現在は分散登校中で来週（15日）から通常登校となるとのこと。共通するのは、

①休校中の対応は、教員個々の対応に任され、主にラインやメールでの状況把握が中心で、オンライン授業などはほとんど実施されていない。

②再開後45分・7時間授業を導入し、夏休みは10日～15日短縮する（北海道は夏季25日冬季25日）が、実際は講習が入るので実質休みなし。

③部活動は時間や対面などの制限をかけて実施。

④休校中特に生徒指導上の問題は起きていない（把握できていない？）が、再開後体調不良を訴える生徒が増えている。

札幌市内の私学では全生徒にタブレットを持たせ、4月当初よりオンライ授業を実施している高校もあり、格差が生じるのではないかという意見もありました。

また、いわゆる困難校では、休校中の生徒の状況把握がほとんどできず、何もできない状態であったとの報告もありました。

文科省は学習指導要領の柔軟な運用に一定の理解を示しているようですが、道教委段階、さらに現場の管理職段階になると、形式的な授業時数確保が優先されています。7時間授業、休暇短縮、行事削減は全道的な流れになっているようです。

特別支援

札幌市近郊の特別支援学校（知的障害）教員からのメールを全文紹介します。（資料②）

義務制

全北海道教職員組合（道教組・全教加盟）の協力をいただき、義務制の状況報告をもらいました。（資料③）

高校生の声

道東の商業高校の3年生の政経授業でのアンケート結果です。（資料「高校生アンケート」）学校名を出さないことで公開ＯＫです。大部ですが、考えさせられる内容を多く含んでいるように思います。

民研評議員会・地域交流資料　北海道②
特別支援学校（札幌市近郊・知的障害）からの報告

本校は寄宿舎（120 名入舎、4～3 人部屋）の併設、全道の中でも大きい寄宿舎となっており、三密を避けがたい状況がそろっていることから学校再開にはかなり慎重に進めてきました。5 月 25 日～3 年生から登校を再開し、翌週 1、3 年生、今週から 2、3 年生、来週から全校登校が開始となります。緊急事態宣言下、休校中、虐待や生活困窮家庭などが炙り出されるのではと心配していましたが、今のところ大きな問題は出てきていません。

さて、緊急事態宣言下の休校中は週 1 で課題プリントを郵送、週一回の様子確認の電話という形で生徒とつながるようにしていました。また週一回返信封筒も入れて、課題を返送してもらうようにしました。本校は昨年から ipad を就学奨励費で一人一台購入し、授業などで活用を始めていました。この ipad を使ってオンライン授業や HR などできないものか、検討されましたが、就学奨励費で購入したものは学校のネットワークしかつなげないというルールがあるらしく、宝の持ち腐れ状態でした。YouTube で体づくりや作業学習の動画を配信したりしましたが、配信が始まったのは、分散登校が始まってからでした。オンライン授業をするにも、道教委が用意するスクールネットでは要をなさず。私は個人的に在宅勤務をしながら部活動として、zoom でオンライン部活をしました。今も部活動は再開できていないので、オンライン部活は土曜に続けています。
改めて学校教育について考えています。特に本校のような特別支援学校は知的障害があるが故に、知識を応用する力に困難さを抱えていることから、体験的、実践的授業、教育活動（作業学習や生活単元学習）に重点を置いておき、生きる力につなげる教育実践を大切にしてきました。それが全くできなくなることで、オンライン授業では代えられない教育活動の価値を実感させられました。そして、オンラインで代えられるような授業では学校教育は終わってしまうという危機感も同時に持ったのも事実です。

行事については 5 月に予定されていた 3 年生の見学旅行は 12 月に延期。これは 2 月に決定しました。6 月の体育大会は中止、7 月の遠足も中止となりました。現在は 11 月に予定されている学校祭をどうするかが目下の課題です。近隣の高等養護ではすでに学校祭を中止にしているところもあるようで、一抹の不安を感じます。校内の意見も安全重視と教育活動重視と二分化されています。それでも本校はコロナ流行の頃から比較的、民主的な話し合いや現場の意見を聞きながら物事を進めていくことができているような気がします。こういう時はスピード感をもってトップダウンで決めて欲しいという意見もありますが・・・。

自分が担当する 3 年生は学校再開から 3 週間目に入りました。寄宿舎の生徒がほとんどなので通学での公共交通機関利用の心配はほとんどありません。帰舎する際は出来る限り送迎をお願いしています。数名の生徒は公共交通機関を利用していますが、多くはありません。通学している生徒の中には、通学時間をずらしている生徒もいます。全体としては割とスムーズに学校生活に入れているように見えますし、友達同士会えることで表情も明るく、学校っていいなと改めて感じる日々です。行事が延期や中止になっていますが、投げやりにもならずこの状況を前向きに捉えようと健気に振る舞っています。
3 年生の進路状況は心配の種です。決まっていた職場体験先（食品製造業、飲食業）何件かからこのコロナの影響で断られており、再度開拓が必要な状態です。特別支援学校の進路指導は主に進路担当の先生が職場に行き、営業の様に一軒、一軒、障害者雇用について話をして開拓するという地道な作業です。訪問がこれまでままならない状況の中、また進路開拓するのは本当に大変な仕事になっていくと想像します。

ここまではあくまでも本校の状況です。まとまりがなく、思いついたままを記述してしまいました。ご容赦ください。特に校種の異なる障害児学校の状況は、また大きく課題も異なると思います。基礎疾患のある生徒が多く在籍していたり、食事介助や排泄指導など感染リスクの高い職場となっていることも想像されます。詳しいことは私もわからないのですが、必要であれば、情報を収集します。

２０人以下学級と教職員の増員を！

宮川義弘　（評議員　東京民研）

厳しい条件の中ですが、私は2次3次の感染対策として、20人以下学級と教員の抜本的増員・緊急採用（養護教員の2名配置含め）を前面に押し出すべきと思っています。東京の小学校校長会の学校再開に向けての要望者にも、子どもと教職員の感染予防について「子どもと教職員の PCR 検査」実施を要求しています。当然だと思います。この間の分散登校の中、未組合員から少人数学級のやりやすさが改めて声となり、都内で広がったスタンダードに頼る必要のなさが新たな気づきとして広がっていると聞きました。注目すべき動きだとおもいます。

学習の遅れが話題になり、オンライン教育が求められているかのように思われていますが効果の少なさが話題になっています。それよりなにより、心のケアをはじめ、子供と教職員の「つながり＝距離の近さ」（オンライン教育は子どもと近づかないまま一方的に課題を指示し、それでやったことになってしまう傾向がある）の大事さが現場では語られています。毎日消毒に追われながら、現場の教職員は“一番大事なこと＝子どもとの心の距離を離さないこと”を安心してできる科学的感染予防体制が整った教室・学校の実現こそ保護者も含めた教職員、そして何よりこの間、タダで自粛を迫られた子どもたちの声だと思います。

私は、開く冬を前に、『保育園・学校緊急事態宣言』を記者会見して発し、①科学的感染対策と20人以下学級の断固とした実施　②授業内容の統制や時数の機械的確保でなく、子どもが本当にわかるように現場にしっかり任せきること　などを子どものために発するべきと思っています。保育園はこの間、厳しい条件の中で対応を迫られてきました。子供の成長にかかわるものとして、一緒に声をそろえたいと思います。

こうした施策をやらせきることこそが子どもの学習の遅れを本当に取り戻していく唯一の道ではないでしょうか。健康安全が保障されなければ何もできません。

政府文科省都教委は非科学的な感染対策と過密授業を強いていますが、もし再び感染が起きたら学校を閉めていかなければならなくなります。学校や保育園を子どものライフラインとして止めない決意と対策に踏み切るのが為政者の責任ある対処でと考えます。

ついでですが、個人的には、今回教員（特に小中学校）はエッセンシャルワーカーとして動くべきだったのではないかとも思っています。保育園や学校は子どもにとっては水やガスと同じ（ライフライン）で会ってよっぽどのことがない限る開き続ける場奇であったのではなかったかと。もちろん科学感染対策を日頃から研修し準備をしておいての話ですが。

東京民研からの学校再開に向けた緊急提言（version1） 2020年5月28日

子どもの命と成長への願いを大切にした学校再開へ

はじめに

３月突然の休校、それが三か月にもなろうとしています。長い教育の歴史の中で一度も経験したことのない事態です。９月入学も検討されています。再開しても、教室環境、時程、授業形態・内容、すべてが今までとは異なります。指導要領の内容を網羅的に教えるのは無理ですし、文科省もそうした要求はしていません。

今、私たちには、傷ついた子どもの思いをどう受け止めたらよいのか、そして、どんな学習を子どもたちに用意しなければならないのかを考えてきました。この提言は、同じ悩みを持つ全都の仲間の再開後の教育活動の参考になればという思いで作成しました。

かつて経験したことのない事態の今だからこそ大切にしたいこと・・・

① 感染予防に万全を尽くし、子どもの命と健康が守れる学校の環境
② 子ども一人ひとりの心と体をあたたかく受け止めたい
③ 学ぶ内容を大胆に絞り込み、大事なことをしっかり押さえた授業（限られた時間だからこそ、学ぶことの楽しさを子どもたちが味わえる）をつくりたい

＊管理職を含め、常勤非常勤、職種の垣根を越え、全ての教職員の思いや考えを出し合って取り組みましょう。
＊保護者の様々な心配事や願いを受け止め、地域とつながる視点も大切に。

校庭を走り回る子どもたち、走り回るのは子どもの特権。休み時間に仲間と語り合う中学生。そうした子どもたちが、体を思いきり動かすことも、仲間と触れ合うこともできず、みんなで学びあうこともできないまま、一日のほとんどの時間を、家庭という限られた空間の中で過ごさなくてはなりませんでした。

多くの子どもたちがゲーム漬けの生活を送りました。テレビと携帯やスマホでの時間が生活の多くを占めました。単調な生活、人間関係の狭さ、活動の少なさ、核家族の中で逃げ場のない、緩衝地帯のない空間での生活が三か月も続いたのです。伸び盛りのしなやかな子どもの体です。三か月に及ぶほぼ家庭での生活が子どもの体と心に与えた影響が心配です。

体内時計の狂い、生活リズムの乱れもあることでしょう。体の変調が心の変調につながるのは明らかです。

「心がコロナにかかった！学校に行きたいけど、感染が怖い！受験が心配！友達に会いたい！」という中学３年生の切実な思いを受け止めて、学校の再開を進めていきましょう。

かつてない事態です。今までの経験が役に立たないこともあると思います。いくら対策をしても、本当にこれでよいのかという不安も残ります。新型コロナに対する知見をもとに、教職員のアイデアを出し合っていきましょう。命と安全のこと、子どもの心と成長のこと、授業のこと、行事のことを本音で話すことで、学校が今までよりもう一歩「子どものための学校」に近づくかもしれません。私たち教職員が、もう一歩だけ「子どものための教師」に近づくかもしれません。困難な時だからこそ、きっと乗り越えた先には希望があります。

長い取り組みです。ゆっくり焦らず、着実に進んでいきましょう。
「私が倒れたら、子どもたちはどうなるのかと思うと、電車に乗るのも不安です」そう話してくれた先生のこの言葉は、すべての私たちの思いです。本格的に学校が動き出します。まだ始まったばかりです。新しい事態も起きるでしょう。

たとえどんなことが起きたとしても、学校を支える私たち大人の心と体の健康、笑顔が子どもたちを支えます。どうか、無理をなさらないでください。

Ⅰ　命と安全、ここからスタートです

今学校再開に向けて様々な取り組みが行われていますが、まず、最初に考えるべき課題は、子どもの命と安全です。規制の解除が進み、経済と感染との兼ね合いを取って、徐々に規制を緩める。再び感染が拡大傾向を示したら、再度規制を強化する。そうした流れで進もうとしています。学校の再開と、経済活動の再開と異なる点は、最大限に「命と健康を守る側」に立って再開に向けた準備を進めるという点です。

○国、都道府県レベルの対策を基に学校の実情に合った対策と環境を、教職員のみんなで作りあげていきましょう。

そのための基本的で具体的な指針を行政は出すべきです。また学校が必要な“もの”と“人”は教育委員会が準備をして学校から要請があればすぐに用意できるようにすべきです。保健室に消毒液もマスクもないなどということは、もう絶対に許されません。

○子どもたちには、ウイルスに対する正しい知識と予防のための生活習慣を身につけるための取り組みを進めましょう。

このことが心の健康を保つことや偏見や差別をなくし、お互いの人権を守ることにもなります。

年に10数回もの避難訓練、保健指導など、私たちは、「命を知る、命を守ること」を、教育課程の中で位置づけてきました。命と健康という土台の上に他の教育活動があるのです。学校再開はここから始まります。

突然の解雇通告。営業自粛で膨らむ負債。経済的に立ち行かなくなった家庭も少なくありません。その影響にさらされている子どもたちです。

ただでさえ、日本の子どもの7人に一人は貧困の中で生活しています。食べものはあるのでしょうか。偏った食事になってはいないでしょうか。給食が救い、子ども食堂で栄養のバランスをとっていた子どもたちは、休校期間中は何を食べているのでしょうか。食という土台さえ脅かされている子どもたちの栄養、発育、健康にしっかり心を配りたいと思います。

Ⅱ　今の子どもをあたたかく受けとめて安心できる教室に

「心がコロナにかかった！」そんな不安をもつ子どもたちの心と体をしっかりと受け止めましょう。

家庭という狭い空間で単調な生活を強いられてきた子どもたちです。三か月の子どもの気持ちのありようは、一人ひとり違います。友達の笑顔が先生のまなざしが、どんなにか子どもを安心させ、励ますことになることでしょう。「友だち大好き」「学校大好き」「先生大好き」そんな安心して過ごせる学級をつくることから始めていきましょう。

今は子どもを抱きしめることはできませんが、その分、思い切り心で抱きしめましょう。「先生に会えてうれしい」「あなたを待っていましたよ」と。

授業を進めなくてはと焦る気持ちもありますが、まずは、学校が始まってよかったと実感できるよう、できる限り子どもと話す時間をとりたいと思います。子どもと直接向き合える学級活動の時間が多くなっていいのでしょう。

子ども同士がつながる、そして笑顔が教室にあふれる、それを見つめる先生のまなざし。そんな教室に。

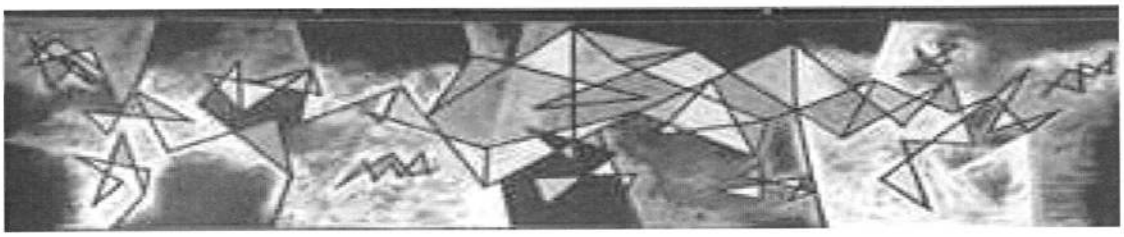
これからは、学校での生活が日常になります。朝起きること、登校、学校での遊びや授業、下校そして家での生活、就寝、こうしたリズムができるように、保護者とも手を取り合って、子どもの生活と学びを創っていきましょう。

何しろ、学校に行かないことが当たり前の生活が長く続いたのです。幼稚園・

保育園の時から、こんなことは誰も経験したことはありません。学校再開で登校することに、一人ひとり葛藤があることでしょう。その葛藤の質は様々です。

「あなたに会えてよかった」と、あたたかく子どもを包み込むと共に、子どもの葛藤や悩みを見つめる確かな眼差しが必要です。

そして忘れてならないのは、三か月も学校抜きで育てた保護者の子どもへの思いです。心配や不安はしっかり受け止めたいと思います。



Ⅲ　学ぶ楽しさと確かな学力を
～大切な内容に大胆に絞り込みましょう～

学校再開に当たって時差登校を計画している学校も多いでしょう。子どもたちも、「友だちに会える」「先生に会える」と心待ちにしていることと思います。子どもたちとじっくり学習できると期待をふくらませている先生方も多いのではないでしょうか。

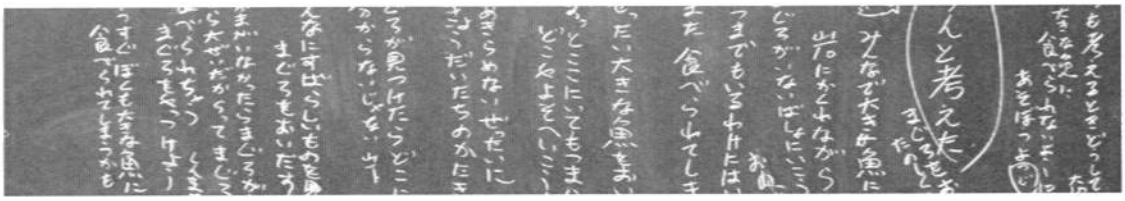
とはいえ、コロナ流行のために学校を始めることができず、すでに二か月が経過しました。今後、第２、第３のコロナ流行の波が来ることも予想されます。そうしたことを考えると、学習の時間は、例年のおよそ三分の二になるでしょう。その短い時間の中で、学習指導要領の全ての内容を詰め込むのは、子どもにとっても教師にとっても過密で負担の大きなものになります。

また、安易に「土曜授業を増やす」「夏休みなどの長期の休業日を減らす」などの対応で、学習内容を消化しようという動きもあります。ますます重い負担に苦しむことになるのではないでしょうか。

ではどうしていくのでしょう。私たちは、次のように考えます。

①学習指導要領の標準時数の確保にとらわれずに時数の見直しを…

安易に土曜授業を増やしたり、週時程を過密にしたり、夏季休業を短縮したりすることは、子どもと教師の負担を増やすことにつながります。また、時数を増やさないまでも、短い時間の中で無理に現行の学習内容を詰め込むことも問題です。今年度の時数をどう設定するかは大きな課題です。一つの学校や一つの自治体だけで見直しを図るのは難しいでしょう。文科省に対し大きな見直しを働きかけていきましょう。



②今年度の学習内容の大胆な見直しを…

現在の状況から見て、学習指導要領に示された内容を全て扱うのは困難です。中には、学習内容を３分の２程度にしぼるのが適切ではないかとの意見もあります。教科学習では、その学年の子どもたちに本当に身につけさせたい力とは何か、考えましょう。教科書を読み、子どもたちに「これだけは」という単元や教材を選りすぐりましょう。そうすれば、逆に、これは削除しよう、軽く扱おう、という単元や教材が見えてきます。そういう単元や教材は、思い切って大胆に削減しましょう。

大切なのは、子どもにとって本当に価値のあるもの、今学ばなければならない大切な内容を洗い出し、それをじっくりと学べるような指導計画をつくっていくことです。

たとえば、算数の「分数」はただでさえつまづきやすく、困難な学習の一つです。もっと時間が欲しいと思っている先生方も多いでしょう。短い時間で進めたら、分数が分からない、算数嫌いという子どもが出てこないでしょうか。それなら「時計」の学習は子どもたちの日常の生活と結びつけて取り上げ、授業時間からは大胆に割愛して「分数」の学習時間にあてる。そうした内容の検討も各教科で必要となります。

③内容によっては、次年度実施が適切な場合があることも視野に…

教科指導全体の検討の中で、次の学年で力を入れて教えてもらおうという単元や教材がでてきます。それは、次の学年でしっかり指導してもらうような計画を作成しましょう。

たとえば、6年生の場合、特に教科としての「外国語」などは、中学でしっかり指導してもらうこととし、小学校では、「英語嫌いをつくらない」を目標にしてはどうでしょうか。年度をまたいでの計画でもいいと文科省が認めています。

④今年度の教科外活動（行事など）の精選・実施は、子どもたちへの成長の意義を考えて…

行事を減らして授業時間の確保を目指す。そんな動きがでています。しかし、子どもたちが学ぶ場は、教科だけではありません。教科外の活動を通しても大きく成長します。たとえば子どもたちは、運動会や遠足などの学校行事を通して、全力をあげることの大切さや力を合わせることの大切さを学びます。また、自分たちで考え、つくりあげた喜びを体感していきます。時には、自分を見つめ自分が乗り越えるべき課題を見つけ、友だちのよさを再発見する子どもも生まれてきます。「一つの行事を終えたら、子どもたちが見違えるような成長を見せた」という経験は、多くの先生方がもっていらっしゃるのではないでしょうか。

それらをふまえると、行事を簡単に切り捨てたり、簡素化したりしていいのか、考えさせられます。学校としての姿勢が問われる場面です。管理職をふくめた教職員が「子どもたちの成長に必要な行事は？」という視点で意見を出し合いましょう。

⑤子ども、保護者、地域の願いを受け止め、教職員の知恵を出し合った学校運営を…

学校が再開されると、子どもたちが、「休み時間おにごっこしたい」「先生給食一緒に食べてよ」「宿題多すぎだよ、やになっちゃう」「先生とおしゃべりするのだーい好き」と、教師の机の周りに集まってたくさん話しかけてくるのではないでしょうか。子どもたちは、長い休校で積もり積もった不安やストレスをぶ

つけてくることでしょう。その中には素通りできない子どもの訴えが含まれていると思います。そうした子どもたちの心の状態に寄り添っていける教師のゆとりも必要だと思います。

またこの休校期間中、保護者も、子どもたちと過ごす時間が増え、生活や学習について悩みや不安を募らせていることでしょう。こうした悩み・不安を取り除いていくことも教師にとって大切な仕事になっていくのではないでしょうか。

経験したことのないとんでもない今だからこそ、「学校と地域保護者と手をつないで」という視点を大切にしていきたいと思うのです。

子どもの願いがクラスを変え、子どもの願いが学校の営みに反映される。保護者が安心して子どもたちを登校させることができる。そんな学校にしていきたいものです。

～コラム～

オンライン授業をどう考えるか？？？

コロナ流行に伴う休校措置の中で急速に広まったのが「オンライン授業」です。ライブ授業を公開したり、動画などを YouTube にアップしたりするなど、苦労されている先生方も多いことでしょう。

このような状況の背景にあるのは何でしょうか？

「とにかく、学習指導要領に示された内容を今年度中に終わらせたい。そうしないと、高校入試に間に合わない」「学校は子どもたちの学習を保障する取り組みが何もできていない。考えられる何かをやっている姿勢を見せる必要がある」などの焦りもあると思います。一方で、「ＧＩＧＡスクール構想（『Global and Innovation Gateway for All』の略－文科省が主導している『１人１台端末及び高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備して、公正に個別最適化された学びを実現させようとする試み』）」が、発表されたが、この機に一気にその方向を進めてしまおう」という意図も感じられます。

しかし現状は、「技術的な壁が高いこと」や「インターネット環境がある家庭

とない家庭で大きな格差が生まれていること」などの問題があげられています。また、「子どもたちが、ネットを通して送られてくる内容に基づいて学習しているかどうかチェックすることができない」「子どもの理解度・定着度を測るすべがない」など、現状のネット環境が片方向であり、双方向で行うのが難しいという問題があります。

しかし、たとえ双方向でオンライン授業ができたとしても、教師と子どもが対面して行う授業の良さにはるかに及ばないのではないでしょうか。子どもたちのわずかな表情の動きの中からその思いを汲み取り、励ましたり助言したり共感したりというのは、現場にいる教師ならではということでしょう。また、授業の中で生まれた問題を、子どもたち同士で考えを出し合いながら解決したという満足感や空気感は何事にもかえられないよさがあるのではないでしょうか。

社会の流れの中で、教師がＩＴ技術を身に付けていくことは大切なことだと思います。しかし、オンラインで送られたメディアを子どもたちが視聴したとして、それで、その内容を学習したとするのは無理があるでしょう。あくまで、教師と子どもたちが対面し教授と学習の過程が組まれることを「授業」として位置づけたいと思います。

オンライン授業は現状ではやむにやまれずに行っている側面はあると思います。しかし、それは「本来の（対面型の）授業」の補完にはなっても、代替にはならないことを銘記すべきだと思います。

先に述べたように、内容の精選を通して、人々が歴史の中で培ってきた価値のあることを、教師が提示し、みんなで話し合い、一人ひとりの子どもが自分の言葉で理解していく。そんな積み重ねで学ぶ喜びが育っていくのでしょう。

＊

ある教育書にこんな一節があります。「授業過程は、一面からみれば、文化遺産の伝達である。しかし、より内面的にとらえれば、授業は、文化財の習得をとおして生徒の諸能力が発達していく過程であり、教材を媒介とする教師の働きかけ（発問とか教示）や生徒相互の影響のもとで生徒が自己発達をとげていく過程である。また、これを教師の側からみれば、文化遺産である教材を使って子どものなかにある可能性を引き出し発展させる過程ということができる…授業は教育実践の中心をなすものであり、教育研究のすべての出発点であると同時にゴールでもあるということができる」。（『現代教育学の基礎知識』（Ｉ）1979年　有斐閣ブックス）

○おわりに

文字通り教職員すべての協力がなくては乗り越えられない事態です。今までとは違う取り組みや課題が待っているのですから。

今までと違う清掃の仕方、今までとは違う調理の仕方、今までとは違う物品の発注、今までとは違う保健室の対応。少数の職種、一人職種の方の思い、願い、不安、そうしたものを共有しましょう。

みんなで支えあって、共感して、思いを出し合って乗り越えていきたい。

きっと学校も、私たちも、子どもたちも前に進める

私たちはそう信じています

今ほど、学校に柔軟で臨機応変な教育活動が、求められている時はありません。

この提言は、かつてない不確実で困難な条件のもとで、子どもの発達と学びをつくるために努力されている教職員の方に、少しでも参考になればという思いでつくりました。学校が再開されても、コロナ感染症の再流行の可能性もあります。どのような事態になろうとも子どもの健康と学びを守る道を探っていきましょう。

ご意見や実践をお寄せください。

寄せられたご意見と実践を基にして、子どもの笑顔と確かな学びにつながるよう、この提言の改訂版を準備していきたいと考えています。

発行・東京の民主教育をすすめる教育研究会議（略称・東京民研）

「東京民研」は、各教科をはじめ２６の研究部会を持つ東京都教職員組合の教育研究組織です。

〒102-0084 東京都千代田区二番町 12-1 ｴﾃﾞｭｶｽ東京・全国教育文化会館 4 階

TEL:03(3230)0841　FAX:03(3262)9705　E-mail:tokyo-minken@educas.jp

（京都教育センターより）

そうだ、学校って―新型コロナウィルス禍で考える―

新型コロナウィルスが世界中に蔓延し未曽有の事態になっている。地球全体を一気に呑み込んで広がるウィルスの脅威。２０２０年、人類はこの危機を乗り越えるために何をなすべきか。

学校休校の措置が取られた。京都府・市の児童、生徒たちは3月から5月6日まで（4月現在。さらなる延長も視野に入れておかねばならない）約2ケ月の自宅待機を余儀なくされている。普段なら休日を待ちわびている子どもたちも、ここに至ってうんざりしている。

休校になるということはどういうことか。

第一は友だちと会えないということ。友だちとしゃべりたい、楽しく遊びたい、友だちとの関係性が断ち切られる、子どもにはこれが一番こたえる。友だちと会いたいなと自宅でうずうずしている子どもの様子をみているとよく分かる。そうだ、学校は友だちがいるところなのだ。

第二は勉強がつまらなくなること。自宅で課題学習プリントを一人でやっていてもつまらない。先生や友だちと顔を合わせないでＰＣ通信学習で元気なんか出る？そうだ、学校は先生と友だちと一緒に学ぶところなのだ。

第三は今まで先生の指示で動いていたけれど、そうだ、自分の頭で考えて何をするか決めて行動するのだ。

第四は給食がないこと。昼食はどうしているのだろう。共働き家庭は子どもで留守番。弁当を作ってもらって食べている？自分でカレーをチンする？菓子パン？栄養は十分か？一人では美味くない、みんなといっしょに食べる給食がいいな、体重が減っていないか？そうだ、給食は文化だ、健康と体力の源だったのだ。

第五は子どもが学校へ行くから親は安心して仕事も出来た。そうだ、学校は安心安全な所なのだ。

第六は学校に子どもの姿が見えないこと。公園にもいない。町から子どもの姿と声が消えた。なんと寂しい光景。そうだ、子どもは周りを元気にさせていたのだ。

○

かつて阪神淡路大震災のときに、また東北大震災のときに教師たちは大事なことに初めて気付いた。

学校に子どもが来るということ、それがどんなにかけがえのない価値あることか。―よくぞ生きていた、よくぞ学校へ来てくれた。

教師たちは語り合った。―今まで私たち、学校はこの子どもたちを心から宝のように大切に育ててきたか。

学校とは何か。改めて考え問い直すときである。

（京都教育センター・季刊誌「ひろば」２０２号　編集後記より　編集長　西條昭男）

こどもの日にこどもたちへ　　戸谷喜之

長―い休校でしんどいね。自由に遊んだり友達と会ったりできひんもんね。別に 3 月から休校せんかてひよっとしたらよかったのに。卒業まえに入試のときに。て。でも、安倍さんは他国に先駆けてとかいうたけど、あの頃は何としても東京五輪を実施したいというためとが一番の理由だったと思う。そして東京五輪が延期になってから本格的に感染が広がり非常事態宣言で休校が続いているというわけ。でも、考えてみたら日本の学校、教室はぎゅうぎゅうづめだし、学校時間も長いし、人間関係も密だし。感染リスクは高いよね。外国でも同じだろって。いえいえ違うよね。先進国では。日本も一応先進国だからほんとうは 15 人~20 人程度の学級で。学校環境もトイレから食堂からきれいで清潔なものでなかったらあかんし、校則などもがんじがらめで。制服なんて毎日洗濯できないよね。基本的に校則もこどもをしばらずある程度自由でなければならないと思うんだ。

「子どもの権利条約」ていうのがあって大人は子どもたちの最善の利益になることをしなければならないてあるんだけど、日本政府は君たちのために最善になることをしてないんだ。

みんなは、これからこの日本社会で５０年以上生きていかねばならない。いや 80 年。くらい。これからも災害やこんな予想もしない事態はありうるだろう。けど、どんなときにも人間が　子どもたちが大切にされる社会にしてほしいと思わないかい。だからこの COVID-19 の教訓として、大人や先生の奴隷(いいなり)になるな。自分の頭で考えて判断できるための学びを練習しよう。おかしいと思ったこと。このほうがいいんじゃないか。と思うことは意見をいおう。子どもたちには意見を表明する権利があるということも子どもの権利条約にはかかれている。だから再開のとき、あきらめず、僕たちはこんな学校にしてほしい。ということを先生にぶつけよう。どうせ言うても無理。と思わずに。学校が君たちの最善の利益を保障する場になるために。私たち大人は全力で応援することを誓う。

最後にまだまだ COVID-19 は市中で広がっている。検査数が少ないから普通の人でも感染しているかもしれない。ぜひ、暑くて面倒くさいけど、外出するときはマスクを着用してほしい。台湾は国民にマスク着用しなければ罰則を与えて感染を最小におさえたそうだ。いのちに関わることだから面倒でも君たちも協力してください。

みんなの力で１日でもはやくいろんな工夫をして学校が再開されるようにともにがんばりましょう。

子どもたちの話に耳を傾けよう　　住友　剛

まずは、目の前にいる子どもたちの話に耳を傾けること。

それから、子どもたちの日々の暮らしをていねいに見守ること。

そして、そういうことができるくらいのおとなの心とからだのゆとりを保つこと。

当分の間、この３つのことを大切にしてください。

こんなご時世ですからね。なにかとおとながつらいときは、きっと、身近にいる子どもも「つらい」と思います。

また、このご時世のなかで、これからおとなが何をすればいいのか。

それは、子どもたちがいろいろと教えてくれます。

その子どもたちが毎日、おとなに教えてくれることをしっかりとキャッチできるような、そんなおとなでいることが大事です。

なので、子どもの話をていねいに聴くことができるような、そんなのおとなの心とからだのゆとりの確保。

そのことを、まずは大事にしてください。

おとなであるあなたが少し楽になれば、その分、子どももきっと、楽になりますよ。

＜コロナ・ウイルス問題とこれからの学校教育の問題・課題＞

一番大切な学級集団・仲間の　集団思考と真の仲間への人間的共感はオン・ライン教育では不十分でないか

２０２０・５　**倉本　頼一**

コロナ・ウイルス問題で、突然休校になって子どもたちは「友達と外で遊びたい、早く学校行きたい」父母の中には「コロナは怖い、子ども守りたいが学校の休みは心配」と子どもや親、教師に不安が増しています。この不安を解消するためと「オン・ライン教育」ＳＮＳ教育が進められて「学校の授業無くても教育は進む」と盛んに宣伝されています。

今回のような突然の休校が長く続く中で「学校放送」や「オン・ライン教育」は一定の役割を果たして　増えると予想できます。教育機器やオン・ラインのために教育予算が増額されるでしょう。コロナ問題が起こる前から「教科書はいらない」「教師の板書はプログラムできている」「一人１人にプログラムに沿って個人教育する」教育産業からの売込みが「下村文科大臣就任」以降進められてきました。このような傾向についてこれからの教育のあり方として次のような問題があるのではないでしょうか。

① 一人１人にオン・ラインで系統だった映像・動画で教科の授業を送り教科の内容を実につけさせる自宅学習で学力がつく子はいます。しかし**自分の家でパソコンの画面を見ながら学習できる子どもは一部の子どもではないでしょうか。**親が横について見守っていける家庭は、そんなに多くありません。いくら系統だって教材が組まれていても集中できる子どもは限られています。ましてや増え続ける発達障害の子どもや特別支援の子ども、またボーダーな子どもには、援助ぬきには、無理です。**多くの子どもが「落ちこぼされます」。**１・２年は基本的に無理でしょう。

② 教科教育を教科の系統を踏まえてプログラム化し、身につけさせることは、一定の学力、興味関心のある子どもは効果をあげることが出来ますが、**「深い思考力、創造力、認識力」を身につけるためには「授業の中で集団思考、話し合い、討論」**が不可欠です。また人格形成に深くかかわる文学教育や作文教育、社会科教育で人間的共感を育てるには授業集団による話し合い、集団の読みが不可欠です。一人ひとりがラインでつながっているだけでは、集団の読み、話し合いはうまくいきません。今日最も期待されている「深い思考力・創造力」の学力をつけるには授業集団・学級集団の「集団思考」抜きにして考えられません。

③ オン・ライン教育を推進するためには**学級定数を「15名から10名」位**にしないと集団全員の１人１人と会話することは不可能です。「教員定数増」「学級定数減」「

「少人数授業」実現のためには「教員定数増」に教育予算をかけるべきです。現在の教育行政は教育産業と結んで教育機器、パソコン等の予算は増額しますが、教員定数増には予算をかけない方針を根本的にかえなくてはなりません。

元気です！

得丸　浩一

「学校あずかり」で教室に来ている３年生に，今考えていることを書いてもらいました（私は６年生の担任ですが…）。

ひまな生活　男子
もうすぐゴールデンウィークだけど
コロナウィルスのせいで
そとであそべないのがいやや
ドッジボールやゆうぐであそびたい

もっと楽しくあそびたい　女子
妹といっしょにあそんでるけど
つまらない
外でもあそんでいるけど
楽しくない
はやくコロナウィルスおわってほしい
楽しいこといっぱいしたい
おもしろいこといっぱいしたい

友だちとあそびたい　男子
家で朝は宿題をやって
夜はゲームと
ほとんどおりがみ
運動場であそびたい

いっぱいあそびたい　女子
家でトランプとかゲームをやって
いっさいおもしろくないし
海とかつりとか
友だちとあそびたくなる
早くコロナがおわってほしい
けんどうが早くしたい
学校がはじまったら
つりと海にいきたくなる
プールもやりたい
バーベキューもしたい
音楽がすきなので

いろんなきょくがひきたい

コロナ　男子
レゴをしているけど
新がたコロナウィルスのせいで外に出られなくて
ざんねん
早くくすりができるといいと思う
図工をはやくしたい
りかをやりたい
みんなであそびたい
はやくいろんなことをおぼえたい

友だちといっぱいあそびたい　女子
わたしは外であそぶのがすきだけど
玄関でぐらいしか遊べません
コロナであそべなくなって
ざんねんだなと思っています
もし学校であそべるなら
タイヤとびばこ
ジャングルジム
一りん車
てつぼうがしたいです
とくにしたいのが一りん車です
できるようになってきたから

やりたいこと言います　男子
つまんないから
お母さんが買ってきた魚（ツバス）をさばいてる
つまらないから
CDをきいたり歌ったりしている
学校始まったら
きゅう食を食べたい
運動場であそびたい

子どもたちは清く、正しく、元気です。彼らにおもいきり楽しい日々を（教室の勉強も含めて）用意して、再開を待ち構えています。

コロナ禍の中で学校と教師を考える

～子どもの権利の尊重がコロナ禍での教育の営みの大原則である～

深澤　司

奈良市に住んでいる私は、つれあいや娘が勤めている奈良市、大和郡山市の小学校の情報が入ってきやすいということを初めにことわっておきたい。

さて、今回のコロナ禍で私が最初にびっくりしたのは奈良市の臨時休校措置の拙速さだった。日本の学校が抱える問題の縮図がここにあると思った。首長や教育産業の公教育への介入に歯止めがかからない＝2006年末に強行された「改正教育基本法」の具体化の姿が浮き彫りになっている、と。

2月27日の夕刻、安倍首相が独断で「臨時休校要請」を行った。科学的根拠も学校再開の条件も示さない「（全国一律の）臨時休校要請」だった。

奈良市はこれを「丸呑み」。3学期最後の日は突然に2月28日になってしまった。「臨時休校」の期日に関する連絡が市教委からあったのは28日の昼過ぎ。現場での28日の午後の混乱は容易に想像できるだろう。2月28日、奈良市の教育課程はシャットダウン（強制終了）した。金科玉条の座にあった「授業時数確保」が、あっけなく吹っ飛んでいった。

ところで、3月2日からの休校措置を仲川市長が午前中にTwitterで先行して発表していたという。現場が置いてきぼりになったのだ。ポピュリストと評される仲川市長の得意な手法であるが、来年の市長選挙を意識してかパフォーマンスが過ぎるとの怒りが教育現場に渦巻いた。

現場の「頭越し」、そしてその具体と責任は「現場丸投げ」である。その後の「学校での子ども預かり」も、午前中2時間の「校庭開放」も、「オンライン学習教材の推奨」も、「オンライン授業の実施」も、「卒業式のやり方モデル」も、臨時休校の再延長も…。

さすがに、この異常さに奈良市の校長会が団結して抵抗。前代未聞だ。素早い市教組の動きに負けないほどに、校長会は緊急要望書をとりまとめ、交渉を行ったそうだ。

コロナ危機は、学校と教師にとってかつて経験したことがない未曽有の緊急事態である。新型コロナウイルスの感染から「子どもの命を守る」ことが、コロナ危機の終息までの学校の基本戦略でなければならない。同時に、徹底した子どもの権利の尊重がコロナ禍での教育の営みの大原則であることを強調したい。

慶応大学の佐久間亜紀教授は、「命を守る」ために最も急がれるミッションとして、①感染防止対策　②子どもへのケア　③感染症専門家による学校再開条件の検討　④感染防止教育・関係諸教育の内容や教材の開発・普及――という4つの課題提起を行っている（佐久間亜紀「9月入学制度に関する論点整理および喫緊の対応を求める要望書」4ページ、2020年4月30日）。

おそらく学校再開後も、かつての教室や校庭の風景はもとに戻らないだろう。

政府の専門家会議による「新しい生活様式」についての提言（5月4日）の学校版が示され、「感染防止対策」の大義名分の下、「子どもの命を守るために」、子どもの学校生活

の様式の変更、子どもの行動の規制・制限が求められていくにちがいない。
「友だちと１メートル以内の接触禁止」「ドッジボールやオニごっこはだめ」「給食でのおしゃべりはやめること」…子ども世界の「自由」のはく奪者として教師が子どもと敵対するのか。それとも、コロナ禍の中にあって子どもの権利を守る伴走者として教師が子どもの信頼をかちとるのか。子どもの権利の尊重について、教師個々の認識と行動がいっそう厳しく問われていくのではないか。

学校再開をめぐって「授業時数確保」がゾンビのように復活し、夏休み短縮、土曜授業、７時間授業まで検討されている。子どもの超過密長時間学習の精神的肉体的負担と苦痛が想像できる教師でありたい。「遊び命」の子どもたちが夢中になれる「非接触の遊び」開発に子どもといっしょに知恵を練る教師でありたい。その分水嶺が、子どもの権利の尊重にあるのだ。
「学習指導要領に子どもを合わせない」「子どもを丸ごと受け止めよう」と呼びかけた大阪教育文化センターの提言「学校再開に向けた、いまだかつてないとりくみを」は、子どもの権利を尊重した「学校づくり」「教育課程づくり」の貴重な視点を提示している（「大阪教育文化センター」のホームページからアクセスできる）。
非常時での「オンライン授業」に向けた整備を無下に否定しないが、教師と子ども、子どもどうしの応答関係が教育実践を成り立たせるという授業の醍醐味や本質、その力量がコロナ禍で教師に問われている。京都や全国の民主教育の実践が、コロナ禍で揺らぐ学校で必ずや光があたり、子どもや保護者、同僚・教職員から信頼が寄せられると私は思う。一方で、「学校不要論」の蔓延、公教育の民営化の流れがいっきに加速する危機を孕んでいる。

＊奈良市教委による「保護者向けオンライン学習教材の推奨」や「オンライン授業の実施」も教育産業の公教育介入・支配の危機として別の機会に詳述したい。「新型コロナウイルス感染症とは」「感染防止のために」の授業づくりと教職員研修の緊急性、学校における感染防止対策の具体化と予算、人的配置の必要なども書きたかったのですが、残念。

どんな学校生活を取り戻すのか？　　高垣忠一郎

安倍首相は、昨日の会見で「コロナの時代の新たな日常を一日も早く作り上げなければならない」と述べ、自らが突然要請した学校の休校措置についても「段階的であっても、子どもたちの学校生活を取り戻していく」と表明しました。
安倍首相は「美しい日本を取り戻す」とか「ニッポンを取り戻す」などと、これまでにも、好んで「取り戻す」という言葉を使っています。ボクが何よりも気になるのは、「どんな学校生活を取り戻していくのか」という中身の問題です。
直接、学校に関わる子どもたちや親、教師は混乱のなかにあることでしょう。だから、とりあえずコロナ騒ぎ以前の日常を早く取り戻したいと思っておられることでしょう。でも、コロナ以前の学校に、そのまま戻すことが本当によいことなのか？それでは、せっかくのコロナ禍の経験が無駄になるのではないでしょうか？そのことも是非考慮していただきたいと思います。
ボクは苦悩する人たちとカウンセリングという関係をとおして向き合ってきました。たとえば、そのなかで、うつ病の患者さんのカウンセリングも経験しています。うつ病の患者さんのなかには、うつ病から治ることを「元気でバリバリ活躍していた元の自分」に戻ることだと思っておられる方がほとんどでした。
その方たちは、元気にバリバリ頑張る自分には価値を置き、それを失った自分には価値がないという思いが強く、鬱になった自分を受け容れ、肯定することができないのです。だから、早く元に戻らないといけないと焦り、余計にしんどくなられる方が少なくありません。
元気に頑張る自分の陰で押し殺されてきた自分、弱音を吐く自分、弱い自分をも受け容れ、もっと遊びやゆとりをもったより大きな自分に戻っていくこと、それが本当にうつ病から治ることなんだとボクは言ってきました。
そういうことを経験してきたボクは思います。學校生活を取り戻しても、それが元の競争・競争のテスト漬け、勉強漬けの過重な授業に戻るばかりか、休校中の勉強の遅れを取り戻すために焦って、より頑張り、より過重な勉強生活に子どもを追い込むようなことには絶対にならないように、切に願います。
折角の大小のちがいはありながらも、誰もが死の「恐怖」や「不安」にさらされたことをも機会に、生死の問題、生命倫理の問題、自分とは誰か、生きるとはどういうことか、人間がその一部である自然・地球環境の破壊の問題、各種感染症の問題、核の問題などに、広げ、深めて、考える機会を提供することも、コロナ禍を経験した学校の大事な役割ではないかと思います。
いま人類は色んな問題を抱えています。そういう問題を「自分事」として受けとめ、その解決策を考えていくことが出来るような人間、色んな人と協力し、対等平等の立場で対話し、論議することができる人間を育てることこそ大事であって、ごく狭い企業の勝ち残りのために有能に働いたり、過労死したりすることも辞さずに奮闘することができるような人材を育てることが大切なのではありません。
　頭だけを使うお勉強ならば、それぞれの子どもがオンラインのネットの端末につながり、それを

通して、それぞれに教材や課題を与えられて、1人ひとりが個別にお勉強するような方法でも、良いかもしれません。だが、教育は本来、人間を育てる営みであり、その人間は肉体も含めた人格丸ごとの存在です。とりわけ、幼児教育や、義務教育の段階では、生身の人間との触れ合いが大切であることは言うまでもありません。
その人間は人間同士の密接な関りあいのなかでしか育ちません。子どもたちのなかには、コロナ禍の密閉、密集、密接を避ける自粛のなかで、たとえ、スマホやパソコンなどを通じてやり取りすることはできても、オンラインのつながりだけではカバーしきれない生身の人間同士の密接な関りあいの大切さに気が付いた子どもたちも少なくないのではないでしょうか？

コロナの時代に「新しい衣装」を夢想する

西田陽子

これまでに経験したことのないコロナ禍の中で、私たちが普通だと思ってきた日常は破れ、綻び、この先がどうなっていくのか誰にもわからなくなってきました。自己中心的にふるまえばウイルスは広がるでしょう。何が正解かわからないから、誰かの言うことにただ従っていれば大丈夫というわけにもいきません。どれだけ視野を広く持ち、先々のことまで考えられるか。世の中で弱い立場にある人々、少数派の人々を大切にできるか。そんな賢さや優しさが、一人一人に求められているのかもしれません。

そんなことを学級通信に書いているうちに、休校措置に次いで在宅勤務が始まりました。新入生の担任になったのにちっとも生徒に会えず、やりとりもできない日々が続いています。いつ使えるともわからない教材を作ったり、授業のヒントを求めて本を読んだりネットを見たり。そんな中で、海外の著作家・詩人で人道活動家、社会活動家でもあるソーニャ・レニー・テイラーのことばに出会いました。かなり大胆に翻訳してみると、以下のような内容です。

「わたしたちは今までのような『普通』には戻らない。そもそも『普通』なんて存在しなかった。コロナ以前のわたしたちのくらしは、決して『普通』なんかじゃなかったーーー　欲張りだし、えこひいき。みんなすっかり疲れ果てて、エネルギーは吸い取られ、何かに追われるように働いたり勉強したり。人とのつながりは絶たれてる。いろんなことがぐちゃぐちゃ。他人に対してむやみに腹を立て、自分のためにはこっそり買いだめ。自分とは違う人たちへの憎しみをあおる。そして何かが欠けている。ーーーこういうのが『普通』っていう世の中を、わたしたちが作ってきただけ。こんなのはちっとも『普通』じゃないのに。ねぇみんな、元に戻ろうなんて思ってはダメ。わたしたちは新しい衣装を縫うチャンスを与えられているんだから。人と自然、そのすべてにぴったりと合う衣装を縫うチャンスを。」

このことばに出会って考えました。夢想したと言ってもよいかもしれません。

このまま外出自粛、休校措置が長引いていったら、どんなことが起こるでしょうか。学校という枠組みから離れて、生活習慣が乱れたり、ネットやスマホにどっぷり浸かったり、ひたすらだらだらと過ごす時間が長く続く子どもたちもいるかもしれません。今までさまざまなものに追われて忙しく過ごしてきた反動から、怠惰や脱力を満喫している中学生や高校生もたくさんいるかもしれません。しかしそんな状態がいつまでも続くものでしょうか。どんどんと落ちるところまで落ちて生活が壊れていく、そんな恐ろしくて悲観的な予想や疑いもあるのですが、人間の本性（ほんせい：human nature）に対する信頼もまた、わたしの中に確かにあります。今までの『普通』を失って、休むだけ休んで、すっかり暇になったその時にこそ、知的好奇心や、誰かと本当につながりたいという気持ちがむくむくとわき上がってくるのではないだろうか、と。そして子どもたちを含めて多くの人々が、ソーニャの言う「新しい衣装」を縫うために、頭や心を働かせ始めるのではないかと。

ふたたび学校で生徒たちに会うときに、希望を持って「新しい衣装」について語り合いたいと思います。

【意見】安易に休校にするな！

個人会員分会　山上修(滋賀民研)

安倍首相は2月27日、突如、法的根拠も、予告もなしに、全国の学校に3月2日からの臨時休業を要請し、以後、3か月も経過した。

（1）学校は子どもの学習権だけを保障する場か

休校を歓迎する市民はともかく、そうでない子や親にとってはどうだったのだろうか。

家で放置される子、昼食のない子、貧弱な昼食しかとれない子、勉強がわからず、宿題が進まない子。家にいるため虐待がひどくなり逃げ場のない子、家を出て、居場所を求めさまよう子。

親にとっては、子どもが心配で働きに行けない、障害児の親にとってはなおさらである。突如、孫を預かることになり、体力がもたない、自分の仕事ができない祖父母等々。

働く親は、家にいる子の昼食づくり、それも長期間で、経済的にも大きな負担。貧しい昼食しか作れない親も少なくない。コロナ禍で仕事を失い、困窮する親も急増し、いらついて家族に暴力を振るうケースも増えている。

学校は、子どもの学習権を保障[1]する場であるだけではない。保護者の勤労権を保障[2]する場、祖父母の老後を保障[3]する場でもある。給食は、バランスのとれた唯一の栄養を保障[4]する場ともなっている。子どもが友と遊び語らい、文化スポーツを保障[5]する場、虐待から逃れる[6]安心・安全の場でもある。

（2）創意工夫して全力で開校を！

このようにいくつもの権利を保障する場である学校を、コロナ禍が理由であれ、安易に長期に休校にすることは許されない。創意工夫をこらし、全力で、学校で子どもを受けとめ、上記のような諸権利を保障しなければならない。

その点を踏まえ全力で創意工夫すれば、時差・分散登校以外にも、方法はあるはずだ。

そもそも、少子化などを理由に学校の統廃合などせずに、20人以下の学級を作っておれば、3密を避けることは容易にできたはずだ。

ゆとりある空間の確保のためにも、学校の統廃合をやめ、40人学級の廃止、20人学級の実現が必要だ。

どうしても休校をせざるを得えなくなった場合でも、家で預かれる子以外は、学校で預かり、3密を避けた教室で自習をさせ、教師は自習する子の質問に答える。子ども同士で質疑応答することも本当は大事。給食も保障する。これでは不公平だ、という親もいるが、そういう子は登校させればいい。既述の通り、休校によってすでに不公平が起こっており、それを救うことの方が大事ではないか。

（3）学習方法の転換・拡大も必要

学習は、子どもが、なぜ？と、疑問をもち、面白い！と感じ、その解決・追究にとりくみ、その過程で必要な知識を獲得するのが基本だと思う。一斉授業から脱却し、そういう学習環境をつくる良い機会でもある。

子どもが疑問・課題の発見に挑戦できる場を、教師が作り、そこで出てきた子どもの質問・疑問について、子ども同士で考えさせたり、教師が助言したり、という「子どもが主体の学び」の環境づくりを広げること。このような学習環境なら、教師は大声を出して、飛沫を飛ばさなくてもすむ。

日本の教育は、いまだに教師が「大きな声で一斉に教え込んでいく」スタイルが主流となっており、受験などが重石となって、変革は進んでいない。コロナを機に、教師の「一斉の教え込み」から脱却し、子どもの「主体的な学び」の実現をめざすユネスコ学習権宣言（1985年）[7]・子どもの権利条約（1994年日本で発効）の流れへの変革を進めたい。

脚注：1：憲法26条、2：憲法27条、3：憲法13条、4：憲法25条、5：子どもの権利条約31条、6：権利条約19条、7：学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し、創造する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である。

【追加】by 山上

学校の休業を決定できるのは誰？

措置内容	決定権者	根拠法
学期、休業日の決定	学校設置者である教育委員会	学校教育法施行令第29条
感染症の予防による臨時休業	学校の設置者である教育委員会	学校保健安全法第20条
非常変災による臨時休業	校長（後に設置者に報告）	学校教育法施行規則第63条

子どもの健康と安全を守るためには、地域の実情に応じた対応が必要です。このため、公立学校の休校措置は、本来的に学校の設置者である教育委員会、校長に決定権限があたえられています。また、文部科学省が各都道府県、市町村の教育委員会に休業を命じる権限はありません。それゆえ、各自治体の首長や、ましてや内閣総理大臣が政治的判断によって命じることはできず、各自治体、学校の実状に応じて適正に判断される必要があります。

学校教育法施行令

第二十九条　公立の学校……の学期並びに夏季、冬季、学年末、農繁期等における休業日又は家庭及び地域における体験的な学習活動その他の学習活動のための休業日……は、市町村又は都道府県の設置する学校にあつては当該市町村又は都道府県の教育委員会が、公立大学法人の設置する学校にあつては当該公立大学法人の理事長が定める。

学校保健安全法

第二十条　学校の設置者は、感染症の予防上必要があるときは、臨時に、学校の全部又は一部の休業を行うことができる。

学校教育法施行規則

第六十三条　非常変災その他急迫の事情があるときは、校長は、臨時に授業を行わないことができる。この場合において、公立

小学校についてはこの旨を当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会……に報告しなければならない。

＜「教職員のための一斉休校要請についての情報サイト」HP より＞

＜子どもの意見表明権＞

子どもの権利条約　第 12 条

1　締約国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。

2　このため、児童は、特に、自己に影響を及ぼすあらゆる司法上及び行政上の手続において、国内法の手続規則に合致する方法により直接に又は代理人若しくは適当な団体を通じて聴取される機会を与えられる。

＜外務省 HP より＞

Covid-19 のパンデミックのなかで思うこと

堀尾輝久（顧問）

１）　世界中のコロナ禍の情報のなかで、高齢で糖尿病の我が身はもっぱら自粛という名の閉塞の状態だが、頭だけは世界に開かれている。それにしても自粛は萎縮ではなく、社会的距離は孤立であってはならない。自分を守ることが貴方を守ること、自己愛と利他愛はひとつのこと。この良識（真実）を言葉ではなく、身体を通して、理解できた人も多いだろう。しかしオリンピックをやるのだと叫んでいた権力者に、いきなり「検査もしない、補償もない自粛」を説教され，強要されても、それは自粛とはいわないのではないか。監視のなかの自粛は萎縮となり、監視の内面化は他者への眼差しを変え、「自粛警察」として攻撃性と差別感情をうむ。

ところで、コロナ禍の前で人は平等である。確かにそうだ。しかし国により、地方により、被害の大きさ、広がりの速さ、対策の違いは明らかであり、医療体制、社会保障のあり方の違いが目に見えるようになってきた。新自由主義のもと医療・福祉を切り捨て、社会の格差を拡げてきた国では医療崩壊を早め、社会的弱者の感染・死亡率の高さは社会的貧困と連動し、それは人間の尊厳を奪う埋葬のされ方にも現れている。貧困と格差の差別的構造は地球規模であることをコロナは逆照射して化視化させている。手洗いしろといっても水がないのだ。感染爆発は当然の成り行きなのだ。

他方でしかし、科学と医療に国境なしの信念のもとでの国際的連帯も広がり、人々の意識も、医療従事者や介護従事者への感謝と、自分のために耐えることが、他者を守り、世界に広がるパンデミックと闘うことなのだという、人類意識と連帯の感覚を目覚めさせてもくれた。それは市民の参加と信頼に基づく政府の、科学的専門性と透明性のある，未来世代を配慮しての、政策を求める意識と繋がっている。「女・子ども」は無視し、軍拡は止めず、ショック・ドクトリンで利益を狙うなど論外である。

２）　グテーレス国連事務総長は一斉停戦と WHO と協力して貧困層と難民の救済の国際的支援を呼びかけた。(3 月２３日、27 日) 地球時代の人類的連帯を！

トランプ大統領は WHO が中国寄りで、初動の判断を誤ったとして、WHO への賛助金を引き揚げる決定をし、さらにコロナヴィールスは中国武漢の疫学研究所から出されたものだとして中国批判を強めている。しかし彼こそコロナを甘く見、アメリカは感染者が少ないと言い、安倍首相とオリンピックも出来ると楽観的であった筈。3 月以降の状況は NY を中心に、全米に広がり、感染者数と死亡者数は一位となっている。医療保険も無く、病院に行けない貧困層や移民の多いヒスパニックの犠牲者が多いのは，新自由主義の先頭を行く「富める国」アメリカが社会経済的には格差・差別の国であることを示している。コロナと向き合い，懸命に努力しているクオモ NY 州知事と，選挙目当てのトランプとの違いぐらいは心あるアメリカ市民には判っていることだろう。アメリカ第一とはコロナ被害のことかの皮肉も聞こえてくる。そうなったのは中国と WHO のセイだと威だけだか。こんななかで民主的社会主義を掲げるサンダース氏の発言が期待されてもいよう。バイデン候補はどこまでその声を受け止めることができるのか。警察官による黒人ジョージ・フロイドさんの殺害事件はアメリカ社会の暗部を照らしだし，人種差別への非暴力の抗議運動は帝国主義的

植民地支配を問い直す国際的な連帯運動にまで拡がっている。

3）　グローバルに広がるコロナへの向き合い方に違いがあり、ヨーロッパではドイツが、アシアでは韓国が成功例として注目されている。国民の信頼に支えられた政府の、科学的知見に基づく決断の速さと透明性に、検査と自粛と補償の一体性に共通点がある。余り報道されていないが，軍隊を持たず、教育と医療に力を注いできたコスタリカのコロナ対応は注目されてよい。スエーデンとベトナムの取り組みについても詳しく知りたい。コロナ対策の違いには民主主義とはなにかが，そしてそのありようが問われている。長期的には人間と自然の関係，命と死への向き合い方が問われている。

長期の緊急事態と自粛は生命と生活のあり方と関係のなかで生きることの意味を問い直している。イギリスのジョンソン首相は自分も被患し、あらためてサッチャーが否定した「社会」を発見したという。国家と個人ではなく社会があることを。

ひととひととの繋がりのなかには子どもがいる、青年もいる。老人もいる。障害者もいる。これまで見えなかった，見ようとしなかった，社会を支える人たちがいる。命を守るために自粛し社会的な距離をとると言っても、そのことによって命を失う、生きている意味を失うひともいる。オンラインでは仕事の出来ない人も多い。

とりわけ発達の可能態としての子どもにとっての「現在」は自分の未来と社会の希望と繋がっている。あそびの場を奪われ、学びの場が閉じられたことは、現在の苦痛と未来の不安として、その欠損は二重化される。孤立化を強いる自粛は「社会」を失うことに通じている。逆に四十人を超える学級が過密社会であることを，二十人学級こそ学びの環境としてふさわしいことをコロナ禍は教えている。学校は変わらなければならない。

子どもたちはいまそのことを体験し、学びを深めるチャンスでもある。そのためには大人がそのことに気づき、自ら学び、親が，教師がその学びを励ますことが大事なのだ。コロナから学ぶことは大きい！生活学習の中心にコロナを据えれば，命と身体・健康への気づき、友達関係の気づきから，社会への気づき、疫病と人類の闘いと共生の歴史、そして地球上のひとびとへと共感と連帯の意識は広がり、一人ひとりの尊厳を軸に，主権者の自覚と政治への関心も育ち，新しい未来も見えてこよう。

（『法と民主主義』2020.5 号のエッセーに大幅に加筆したもの。5 .30）